

21世紀における情報資源と共有と活用とは — 博物館の視点から —

鈴木卓治 国立歴史民俗博物館

1 はじめに

国立歴史民俗博物館（歴博）という職場に奉職して8年目になる。今回、博物館員の視点から、21世紀における情報資源と共有と活用について述べよ、という課題を与えられ、いざ考えてみると、そのときどきの最善手を考えこすれ、いまだ体系だった論理が自分の中に存在しないことに愕然とする。それでも、これまでの仕事を振りかえってみると、「れきはくホームページ」の作成 [1]、古文書閲覧システムの開発 [2]、バーチャルキモノ試着システムの開発 [2]、絵画資料自在閲覧システム [3] の開発など、博物館に眠る「情報資源」を掘り起こし、インターネットや展示などによって情報を「共有」し、資料と人間の仲立ちとしての情報を「活用」する仕事になっているかもしれない、と考えなおしてみた。

“博物館情報”に対する考え方は、それぞれその館の数だけ存在する。同じ博物館と呼ばれていても、自然系、理工学系、歴史系など、取り扱うジャンルが異なれば考え方も違ってくる。ましてや最近では、図書館や教育センターなどの複合機関として存在する博物館も存在し、博物館という枠内で議論すること自体、ナンセンスになりつつある。

にもかかわらず、いわゆる「デジタル・アーカイブ」における情報発信源の有力候補としての博物館のイメージは強いだろう [4]。博物館の立場からしても、自分たちの長所を自覚し、生き残りのための重要戦略として“情報”の問題を意識しなければならないことはまちがいない。

試行錯誤の途中経過として、博物館情報の資源化、共有、活用について、考えをまとめてみた。

2 博物館情報の資源化

確かに博物館は潜在的には情報資源の宝庫には違いない。しかし、資源を掘りだし利用可能とする作業はなかなかうまく進まない。情報の資源化には、研究者レベルの知的活動能力をも

ち、なおかつ根気強く作業を継続できる、研究者とは別の価値観をもつ人間が必要である、と痛感する。専門性という点で、キュレーター、ライブラリアン、アーキビストに求められる素養と一部は共通しているが、記録と活用のかねあいに対するバランス感覚がより強く求められる。

歴博では、「れきはくホームページ」を、一般向け博物館情報の提供に関する研究ととらえ、研究支援推進員の制度を活用して専任のスタッフを確保し、コンテンツの開発やメンテナンスにあたっており、成果を収めている。このようなシステムをより一般化して、情報の資源化を計画的に実施するべく、情報委員会のもとに情報企画小委員会を組織し、活動を行なっている。

欧米では、テクニシャンと呼ばれる職種が存在して、研究環境の整備や実験装置の作成などに携わっており、研究者が研究内容だけに没頭できるような仕組みが整備されている。日本では、大学院生などが OJT をかねてテクニシャンの役割を担うことが多いが、学生が研究室を出てしまうと、ノウハウがうまく継承されず、研究室の資産としていかせなくなるのが往々にしておきる。

“情報資源化のテクニシャン”の仕事に興味をもって取り組める人材を、きちんと探して育てていく体制作りはどうすればよいか。それにはまず、博物館情報の資源化に価値を見出し、意欲をもって取り組んでくれるような、建設的な知性を養成する必要がある。これは博物館だけの問題ではない。今日の高学歴社会にあっても、われわれはもっぱら技術のトレーニングにばかり終始して、知性というものに対する価値観を育む努力を怠ってきた結果、自分の知的能力を社会に還元し、互いに知的な喜びを与えあって共生していくことをせずに、自分の価値も他人の価値も不当に低く見積もり、損得勘定のためだけに知を利用する利己的な「頭のいい人」を大量生産してしまっている。これは何ともさびしく情けないことだ。

心豊かに生きるために知を楽しむ場として、博物館から発信すべきメッセージはたくさんあるように思われる。情報の資源化は、そうした文脈のなかでとらえたい。

3 博物館情報の共有

情報の共有には、データベース書式の統一が必要とかつては考えられていた。しかし統一にこだわるあまり、必要なデータが記録できず使えないデータベースを作るのはそれこそ無駄である。歴博でも、館蔵資料目録データベースを、資料管理にも研究情報の記録にも使える万能のものにしようと、何年もかかって書式を標準化した結果、必要な情報が入らない、どちらの側面からも中度半端なデータベースになってしまった。現在では、資料目録データベースは用途を資料管理に限定し、研究のための情報は、資料の種類ごとに異なる設計の個別データベースを作成して対応する方針に切り替えている。

用途ごとのデータベース設計の個別化を許し、なおかつ共通の検索手段を提供することが、情報工学に与えられた宿題になっている。とくにここ数年は、Z39.50 と XML を中核にしてこの宿題に答えていく動きが活発になるだろう。ただこれらの技術も過渡的なものにとらえるべきであり、最小のコストで最大の結果を得られるよう、柔軟な対応が求められる。

博物館の世界では、ICOM (国際博物館会議) の国際委員会のひとつ CIDOC[5] が提唱する共通資料目録のスキーマである CRM の ISO 化や、Z39.50 への対応がすすめられている。一方で、Dublin Core を拡張して、図書館でも博物館でも専門分野に特化しない情報検索ができるようにする動きも活発である。どちらの方針が賢明か、今後の動向に注目する必要がある。

4 博物館情報の活用

利用者の活用に耐える博物館情報とは何か。資源化と密接に関連する課題であり、さまざまな答えが考えられるが、ここで挙げておきたいのは、素材としての利用に耐える情報であること、確かな根拠にもとづく正確な情報であること、という点である。

市販のデジタルカメラを使って、精度よく色情報を記録できることが可能である [6, 7]。これで画像データベースの画像としてデジタルカメラの撮影画像を提供することにより、正確な色情報をもった画像を利用者に提供することができる。利用者は手もとの CRT やプリンタで正確な色再現を行なって画像を見ることができ、また研究情報としても、数量的分析に耐える客観性のあるデータとして利用できる。

色情報のデータベースとして、日本の伝統色

の著名な復元色票資料について、色票の測色値および色名を含むデータベースを編纂した [8]。これも正確な色情報を提供し、研究情報として、また配色デザインのアイデアソースとして、さまざまな活用が期待できる。

5 おわりに

博物館情報の資源化、共有、活用という三つのテーマで考えてみた。まったく論の体をなしていない点はどうかお許しいただきたい。

情報をきちんと作って発信していく必要性はじゅうじゅう承知しているところであるが、研究者の習性として、情報の本質を見ぬいたり利用することには興味があっても、実際のデータ作成をこつこつ継続することはつい億劫になってしまう。テクニシャンとの二人三脚の体制を整えて、たがいに啓発しあいながら情報の資源化、共有、活用に取り組んでいく「正の循環」を構築していきたい。

参考文献

- [1] 鈴木卓治: 歴博にインターネットがやってきた — つながった・使ってみた・どう広げよう? —, 情報処理学会研究報告, 95-CH-26, pp.25-30(1995).
- [2] 鈴木卓治, 安達文夫, 小林光夫: 博物館におけるデジタルデータの活用と保存に関する一考察 — デジタルアーカイブは構築できるか —, 人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2000) 論文集, IPSJ Symposium Series, Vol.2000, No.17, pp.25-32(2000-12).
- [3] 鈴木卓治, 安達文夫: 歴史研究・展示用画像表示システムの機能に関する検討, 人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2001) 論文集 (2001-12).
- [4] 安達文夫: 歴史・民俗資料を遺すために, 特集「新時代の映像情報メディアへー 文化, 歴史, 伝統を支えるメディアへの展開 —」, 映像情報メディア学会誌, Vol.55, No.1, pp.47-49(2001).
- [5] <http://www.cidoc.icom.org>
- [6] 鈴木卓治, 宮永暁生, 小林光夫: デジタルカメラ撮影画像からの測色値の推定について, カラーフォーラム JAPAN2001 論文集 (2000-11).
- [7] 鈴木卓治, 小林光夫: 市販デジタルカメラによる資料撮影と色値推定の試み — デジタルアーカイビングに耐える色彩画像を考える —, 人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2001) 論文集 (2001-12).
- [8] 小林光夫, 鈴木卓治: 日本伝統色復元色票データベース, 国立歴史民俗博物館研究報告 (2002年出版予定).